

★特集

# 大学とは何か

インタビュー

## 開かれた日本の大学へ

葛西康徳・東京大学教授に聞く

1

二一世紀教養教育の行方 小林傳司 10

熟柿化する大学はどこに向かうのか

山上浩二郎 16

★連載

初版本、ナンセンスなフェティシズム

黒岩涙香訳述・富岡永洗口絵『繪すがた』

酒井道夫 表 2

大学出版部ニュース 21

大学と社会を結ぶ  
知のネットワーク

# 大学出版



一般社団法人  
大学出版部協会

THE  
ASSOCIATION  
OF  
JAPANESE  
UNIVERSITY  
PRESSES

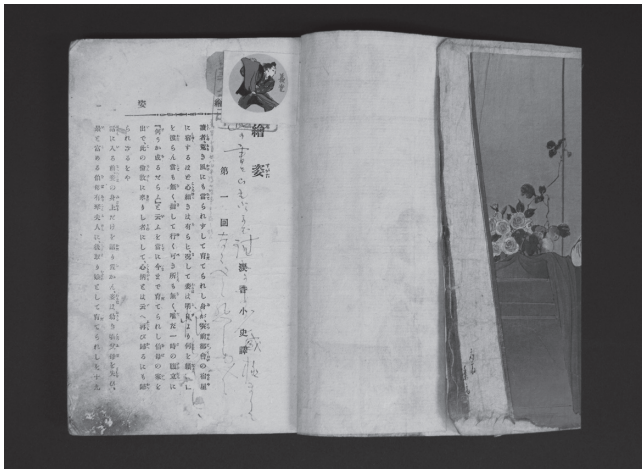
NO. 91  
2012.7  
★夏

初版本、ナンセンスなフェティシズム

黒岩涙香訳述、富岡永洗口絵

『繪すがた』

酒井道夫（二代目酒井九波堂）



書き込みあり、再三の裏打ち、蔵書印の上に蔵書票、舐め舐めの黒ずみ。確かにポロポロのヘタレ本だが、ここまで読み継がれれば、本としても本望か……

あまりのポロポロぶりにちよつとひるんだけれど、まあ百余年前の読書行動を窺うのに好都合な汚れぶりだと我慢して読み出したら、これが結構面白くてすつかり釣り込まれてしまった。涙香の翻案小説なんて、昔、大学の教養科目「近代文芸思潮」を受講して以来敬遠していたところへの再会。「繪すがた」の原著が何かというような詮索はさておき、主催する『萬朝報』に自ら様々な形式で小説を連載して読者大衆を惹き付けたというのはこういうことだったのかと、その氣迫と手腕に改めて恐れ入る。

三〇〇円で入手した手元の本（扶桑堂、一八九九）は、長い間の貸本稼業で尾羽打ち枯らす風情だが、元々は艶やかな装丁だったに違いない。表紙と巻頭折込みの口絵は極彩色の木版画（多分）だが、もはや二重三重に裏打ちが施されていて初々しかったはずの当初の面目をすつかり失っている。針金綴じだったらしい鉄ピンはとつくに抜き去られ、その代わり麻紐の三つ目綴じに変更され、それも再三綴じ直された形跡がある。無論、背クロスは後補。肝心な場面が一ページ引き千切られて失われている。

やれやれとんだ「ヘタレ本」だが、きわめ付けはページ下端に濃く染み付いたバツチイ黒ずみ。昔、祖父が指を舐め舐めページを捲って読書していたのを思い出してしまった。「明治の人は皆こうやって読書したんだ」と改め感慨を抱く。

ところで、明治三八年の書き込みがある。「十月廿八日午後七時半ヨリ読ミ始ム」(第二回)、「午後拾時三十四分参番町〇〇番地ノ或ル女学生之ヲ読ミテ大ニ同情ヲ表ス!!!」(第三回)、「午後十一時四十七分終ル」(第三〇回)とある。無論読み難い文語文ではないが、四時間一七分で一、二〇ページを一気に読了したらしい。そんなものかな！

それにしても、女学生登場のタイミンがなんだか不自然。アヤシイ事情でもあるのでは、といらぬ憶測をしてみるのも楽しい。

## 開かれた日本の大学へ——葛西康德・東京大学教授に聞く

【解説】葛西康德氏は、一九五五年生まれ、東京大学法学部助手、新潟大学法学部教授、大妻女子大学文学部教授を経て、二〇一一年より東京大学大学院人文社会学系研究科教授。著書に『法が生まれるとき』（共著、創文社、二〇〇八年）、『これからの教養教育』（共編、東信堂、二〇〇八年）、ほかがある。専門である西洋古典学・法制史に加え、教養教育についての研究も進められ、人文・社会科学振興プロジェクト（日本学術振興会）「教養教育の再構築」のグループ・リーダーも務めた。

昨年発表のエッセイ「Mixed Academic Jurisdiction

### 学士課程へのこだわり

——はじめに、大学教育について興味を持つことになったいきさつを教えてください。

——グローバル時代の学士課程」（『創文』〇三号）は、「置換」「普及」「管轄権」など、新たな視点を導入したユニークな大学教育論である。今回のインタビューでは、そのキーワードの丁寧な解説をもとに、日本の大学教育の現状と課題について論じていただいた。社会の変化に伴い大学も大きな曲がり角を迎えているいま、今回のインタビューには示唆に富む論点が散りばめられていよう。読者の皆様の参考になれば幸いである。

（聞き手・構成 東京大学出版会・山田秀樹）

私の専攻は西洋古典学、なかでもギリシャの文学や歴史を研究しております。ただし、私は法学部出身ということもあり、ギリシャ文学に出てくる弁論術を通して「法」なるものを考察するなど、文学や歴史学の先生方の通常のアプローチとはやや異なります。自分のやっていることをな

なかなかスッキリ説明できないですね(笑)。三〇代はじめにイギリスのプリンストル大学に留学し、Ph.Dを取得しました。その後、オックスフォード大学で在外研究なども行ってきました。

大学教育に興味を持ったきっかけは、二つほどあります。ひとつはイギリスに留学したとき、日本では既に教員の立場でしたから、「教える者」と「教えられる者」という、両方の眼で見られたことです。日本の大学院生が海外に留学すると、やはり学生の眼でしか大学を見られませんが、私の場合、教員でもありましたから教え方にも眼がとまりました。イギリスの制度と日本の制度はやはり差が大きかったですね。特にオックスフォード大学に行ったときは、これが同じ大学かと思うほど、日本の大学との違いに驚きました。

もうひとつは、二〇〇三年秋からの日本学術振興会・人文社会科学振興プロジェクト「教養教育の再構築」に参加したことです。「教養」という言葉を手掛かりとして日本の大学制度全体が分かってきて、おもしろく感じるようになりました。そのなかでも、「教養教育」というコンセプトが示すように、私がこだわっているのは学部教育、すなわち学士課程です。

——日本の大学全体が大学院を拡充し、専門性が高まる大学院が目されるなか、なぜ学士課程にこだわるので

しょうか。

一九九〇年前後から、特に研究大学と称する大学は大学院重視になりました。表向きはともかく、そのホンネのところは予算獲得であつたにもかかわらず、現実にも教育や教員を大学院の方にシフトしてしまつた。したがって、学士課程あつての大学院なのに、学士課程教育については少なくとも相対的には役割や責任が小さくなりました。人間には一日二四時間しか時間がないわけですから、大学院を重視すれば学士課程の比重は下がります。

他方、一九九一年の大学設置基準大綱化により、教養課程と専門課程の区別が廃止されました。従来の教養課程と専門課程の二分法に対する批判はありましたし、私も批判的に見ていたところがありますが、それに代わるものをどうするかという議論がなく、かつ大学院重視になつた。例えば、法学教育の中心も専門職大学院としての法科大学院に移りました。

つまり、結果的に学士課程が空洞化されたことに対して、私は強い危機感を持つていたのです。これが、私が学士課程にこだわる消極的な理由です。

積極的な理由を挙げますと、一八歳から二二歳というのは一番能力が伸びる大事な時期だからです。一八歳までの教育は、日本だけでなく、おそらく中国やイギリスなどほかの国でも、ある程度はスクール・エデュケーション、す

なわち教科書的なものを覚えることだと思います。

自分で批判的な見方をしていく能力は一八歳頃から培われますので、学士課程の時期にあたる一八歳から二二歳は、二二歳から二六歳より何倍も大事だと思うのです。それなのに、学士課程についての議論がない。そして教員が割く時間も減る。これは問題だと思いました。

### 特殊な日本の学士課程

——日本の学士課程は現在、世界のどこを探しても、またいづれの時代を探しても、類似のものが見当たらない「置換」不可能なもの指摘されていますが、これはどういうことでしょうか。

「置換」は私が議論する際のキーワードのひとつです。「parallel」を「置換(可能性)」と訳しているのですが、私たちは、あるものとあるものを比較するときに、少なくとも、ある視点、あるものさしで同じ天秤の上に置けると思

うから比較するわけです。

日本の戦前の高等教育は、ヨーロッパ型です。大学教育を受けられる人は限られ、その前段階として旧制高校がありました。戦後は、そこにアメリカ型をミックスしました。私は、アメリカ型を採り入れたと言われていることは不正確だと思いますが、ともかく、それにより非常に奇妙な日本型ができたのです。ただしこの時点では、まだヨーロッパ型とアメリカ型のミックスという言い方で一応説明でき、比較もできました。つまり、「置換」可能と言えたと思うのです。

分かりやすい例を挙げますと、外国語を二つ履修する、あるいは数学専攻の学生も人文・社会科学の科目を履修するのは、「アメリカ大学モデル」としてある程度説明できました。ところが、九一年の「大綱化」により、極端な話、「自由にやれ」ということになります。そうしますと、どこを参考にし、比べるのかということになるわけ

## 世界中の日本と神々

大山喬平  
ムラの持続性とムラの生活を支えてきた「神々」について論じる。中世史研究の泰斗による画期的論集。A5判・定価12,600円

## 泰平のしくみ

—江戸の行政と社会—  
藤田 寛  
政治の安定による社会の発展と成熟をみた江戸時代。長きにわたる泰平を支えたしくみを読み解く。四六判・定価2940円

## 東南アジアから見た近現代日本

—「南進」・占領・脱植民地化—  
をめぐる歴史認識  
後藤乾一

実態と認識の両面から相互関係を総覧する。A5判・定価7140円

## 内村鑑三の人と思想

鈴木範久  
「普遍」を掲げる思想を抱いて日本近代を駆け抜けた。稀有な精神の軌跡を描く。人間内村に迫る本格評伝。四六判・定価3360円

## 東国文学史序説

浅見和彦  
畿内中心の文学史観からの脱却を提唱する。A5判・定価13,125円

岩波書店  
東京・千代田・一ツ橋  
[定価は消費税5%込み]  
http://www.iwanami.co.jp/

もちろん、自由にやれ」ということになっても、実際には、ある程度モデルのようなものがありますし、システムをあまり変えていない大学もあります。とは言え、制度上「自由にやれ」という国は日本ぐらいではないでしょうか。

その結果、日本の大学は「比較」ができない、すなわち「置き換え」ができないものとなりました。

——加えて、日本の大学には「監査」が及ばないということですが、それはどのような事情によるのですか。

「監査 (censorship)」が及ばない理由として、ひとつにはどうしても言語の問題があります。例えば古典学でも英文学でも、日本でやっていることが外からは見えませんね。

「監査」という言葉を使いますと、監査する人がいて、「監査する」「監査される」という縦の関係のニュアンスを帯びてしまい、違和感を抱く人がいるかもしれません。ともかく何をやっているか外から見えないということ。その「見えない」ことをよしとしているというか、そこにあまり問題を感じない人が多いように思います。しかも大学教育の制度設計につき自由度が増したため、なおいつその問題として認識されなくなっています。

「監査」を及ぼす例として最近時々見られるのは大学院教育です。博士論文の段階では、フランスの大学のある博

士論文の審査員として日本人研究者が招かれることがあります。逆に日本人がフランス文学の博士号を東大でとる際に、例えばリヨン大学の先生を審査員として招くなど、交流は始まっています。

しかし学士課程では、最近「評価」が唱えられるものの、評価委員をアメリカやイギリス、あるいは中国などから招くケースはほとんどないように思います。もともと自然科学の分野、とくに数学などではすでに始まっているかもしれませんが。

### 「普及」の視点を採り入れる

——「無監査」の現状をブレイクスルーするひとつの視点ですが、もうひとつのキーワード「普及」でしょうか。

そういうことです。「diffusion」を「普及」と訳していますが、この「普及」の問題を気付かせてくれたのは、あるスペインの先生です。かつて、イエズス会の日本での布教のやり方について、ローマ教皇は非常に不安がり、恐れを抱いたのです。というのも、イエズス会宣教師は現地の言葉を勉強し、現地語すなわち日本語で布教したわけですが、日本語が分からない教皇から見ますと、宣教師が実際に何を教えているのか把握できない。異端的な教説を教えているかもしれないのです。

この話を聞いて、私は目から鱗が落ちる思いがしました。

つまり、われわれは近代以降は西欧文化を、それ以前は中国文化を継受したわけですが、「理解する」「受け入れる」ということにしか関心がなく、それを向こうの人がどのように伝えたかったのか、あるいは向こうのものからどのように変化していったのかということは、向こうの人の話であって、われわれには関係ないと思ってきました。

その意識は今でも同じです。そして、問題はそこにあると思います。「普及」という言葉は「伝播」と言い換えてもよいのですが、「仏教の伝播」あるいは「キリスト教の伝播」とは言いますが、「法の伝播」「文芸の伝播」とはあまり言いませんね。仏教やキリスト教の「伝播」というのは向こうの眼から見た言い方です。例えば釈迦が生まれたインドからの見方として、伝播して大乘仏教になったとか、チベット仏教になったなどの言い方をします。

ところが、日本人は宗教に関してはそのような視点を持つのに、なぜ文学や法学など世俗の学問に関してはそのような視点をあまり持たなかったのかということに、私は関

本山美彦・川元祥一・大野和興・三上治・河村哲一・高橋順一・伊藤述史 編

二〇〇年

# 3.11から二年

近現代を問い直す言説の構築に向けて

鈴木和雄 著

六九三〇円

## 接客サービスの労働過程論

感情労働・労働移転などの主題にそくして理論的に考察。

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20  
電話03-5684-0751  
http://www.ochanomizushobo.co.jp/

新刊案内

3.11とその後の1年は何だったのか。

近現代を問い直す脱原発への確固たる言説・思想を構築しなければならぬ。編者をはじめ23名の批評集。

えなければいけないと思うはずです。

——日本の側から見た場合、向こう側の様子は関係ないと思ってしまうのは、いわば自然な考え方のように思います。ある教養や学問が正当であるか異端であるかなどというのは、普段のわれわれには関係ない、むしろ余計なお世話ということになるでしょう。

仮に日本が植民地だとしたら、われわれの視点も変わってくるのでしょうか。

それはこういうことです。日本でも、一九世紀の終わりまでは外国人教師がほぼ全部の分野にいました。法学についていえば、ポアンナードは一八九五年まで日本に滞在し、民法、刑法、刑事訴訟法をつくりましたから、直接ポアンナードから学んでいたわけです。むしろ皆、日本人が教えるのはインチキだと思っていたはずで、インチキとまで言わなくとも、レベルが落ちるといえるか……。

しかし一九〇〇年を境にして、教師は日本人に入れ替わりました。いろいろな理由がありますが、ひとつは給料の問題だったようです。外国人教師に対しては、通常の三倍ぐらい払う必要がありましたから。

これまで、向こうの人の視点はわれわれとは関係ないということでも自らを正当化してきましたし、現に植民地ではなかったから、一九〇〇年以降、向こうの人が来ることも

あまりなくなりました。そして、日本は努力してほとんどの文化を「翻訳 (translation)」すること、ほぼ日本人

だけで、学問や教育ができるようになりました。しかしその結果、そのときに向こうの人が教えようとしたこと、あるいは伝えようとしたこと、そしてそれがいかに変化しているかという視点は、抜け落ちることになりました。向こうの人にとっては、日本は植民地ではありませんし、そもそも言語が日本語ですから理解しようとしても無理ですよね。無理とは言わないまでも、まず彼らのなかで、日本の状況を理解しようというインセンティブが沸かない。

そうなりますと、「普及」の視点が消え、「継受 (reception)」の視点だけになります。その結果、日本のなかで、日本人だけで独自の学問や教育が進むという、最近の言葉でいえば「ガラパゴス化」が起こるのです。

「ガラパゴス化」は必ずしも悪くないというのは、ある程度分かります。しかし、向こう側からの視点がないというのは、少なくとも可能性の半分を閉じてしまうことにならないでしょうか。

例えばこう考えてみてください。アメリカの大学で、英語だけで日本文学を教えている、源氏物語などのテキストも英訳があり、先生もアメリカ人ばかりであるというときに、日本人の日本文学研究者は傍から見えてどう思うでしょうか。もちろん日本人の研究者は英語ができますから、アメリカの大学で行われていることも把握できますが、英語

だけによるやり方はやはりインチキだと思いますよね。やっぱり首を傾げますよね。


われわれはそれと同じことを、特に戦後、もっと言えば一九七〇年以降は延々とやってきたのです。

——とは言え、最近は海外の大学でTOEFLを取得する人もいるわけですから、向こうでトレーニングを受けた彼らが帰国して「普及」の視点をもたらしてくれることもあるのではないのでしょうか。

確かにそう思います。ただし、学士課程を向こうで受けた人がいない。これが最大の問題です。

おそらく、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、あるいはロンドン大学の学士課程に入るには、日本で教育を受けていたのでは無理です。あるいは数学や物理であれば、日本で教育を受けたとしても、向こうに行つて予備校みたいなどころに一年間通えば、力がある人は確実に受か

◆ 未来社最新刊 ◆  
沖縄写真家シリーズ  
琉球烈像 第8巻  
**中平卓馬  
写真集**  
沖縄・奄美・吐噶喇  
1974-1978  
◆6090円



【宮本常一著作集別集】  
私の日本地図8  
**沖縄**  
宮本常一 著  
香月洋一郎 編  
◆2310円

**闘争する境界**  
復帰後世代の  
沖縄からの報告  
知念ウシ・興儀秀武・  
後田多敦・桃原一彦  
◆1890円

**普天間**  
坂手洋二  
◆1890円

**悲しき  
亜言語帯**  
沖縄・交差する  
言語植民地主義  
仲里効 著 ◆2940円

未来社 〒112-0002  
東京都文京区小石川3-7-2  
tel 03-3814-5521  
http://www.miraisha.co.jp/  
★出版図書目録無料進呈いたします★  
※価格は税込

と海外お互いに学士課程に入りやすくする可能性は拡げられるかもしれません。

一方、その裏返しとも言えるのですが、留学しやすくなることにより、大学院は空洞化して行くでしょうね。先日、東大の文学部で秋入学のことが話題になったのですが、ある先生が「いやはや、優秀な学生は大学院に誰も来なくなりませぬ」と言われたのです。誰も来ないというのはオーバーですが、要するに学生に留学しろと言っているわけですから、大学院も相互に留学しやすくなるわけです。そうしたら優秀な学生はハーバードやオックスフォードなど向こうの大学院に合格して、向こうで学位を取るでしょう。もちろん、東大と海外の大学それぞれの大学院の自身をしつかり見極めなくてはなりません。

### 「管轄」の壁を取り払う

——海外との交流を考える際、先生の議論のキーワードにもうひとつ、「jurisdiction」があります。「管轄権」と訳されていますが、これはどのようなものでしょうか。

“jurisdiction”はもともと法律用語です。ある事件をどの裁判所が扱うか、例えば国際私法の分野では、「日本の裁判管轄が及ぶか」などと言いますよね。

私が念頭に置いているのは大学の教員です。なぜ日本には外国人教員が少ないか。

と、日本人と同じ、ないしはそれ以上の人材は来ないと思えますが、周りにそのような自覚はありません。もつと言えば、そうした人材をわざわざ採る必要はない、日本人三人いれば済むということになってしまふ。

なぜ三倍必要かと言いますと、ひとつは特に子供の教育費。日本で教育は受けさせられませんが、それは将来の可能性をものすごく狭めることになるからです。となると、本国で受けさせる。そのためのお金が要る。もうひとつは、精神的・肉体的な保険ではないでしょうか。私たちが西洋社会で生きてゆくのがしんどいように、彼らも日本社会で生きてゆくのがしんどいのです。

もつとも、外国人でなければダメというわけではありません。外国人を招く際は、日本の大学や学問の状況を最初から説明しなくてはなりませんから大変です。その点、日本人であれば、ある程度「以心伝心」がはたらくのでスムーズです。ですから、学士課程は外国で修了し、きちんと学位を取得した優秀な日本人が、日本の大学で教えてくれ

これに対し、日本の教員が優秀だという説明には少し無理があります。外国人の「管轄」が及ばないようにしているひとつの要因は言語ですが、私は、言語よりも行政事務、アドミニストレーション、大学行政といったものが複雑だからだと思います。もし教育と研究だけであれば、イギリス人でもアメリカ人でもドイツ人でもできます。しかし、例えば試験問題を作るといのはまず無理でしょうし、授会での日本語の議論についていくのは大変でしょう。日本の大学に就職する以上、日本語をマスターすべき日本人は言いますが、それはあまりに日本語というものを強く押し出しすぎている。

ただし、最近状況が少し変わりはじめたと思います。中国人が日本の大学にも就職していますし、彼らは日本語ができます。そして中国人の教員が日本人の教員より明らかに優れているのは、「英語力」、それから「議論する力」です。とはいえ現状では、例えばイギリスの教育を受けた人が、日本の大学で教えるのは語学ぐらいしかありませんから、まだまだと言えるでしょう。

この問題を考える際に悩ましいのは、優秀な外国人の教員を日本に招こうとしても、日本人の教員と条件は同じということですが、一部の例外を除いて、給料は私たちと同じです。同じ給料でも日本に来るはずだという前提があり、逆に、なぜ多く払わなくてはいけないのかという議論になってしまうのです。私は、日本人の三倍の給料を払わない

るのが理想かもしれません。最後に、一九九〇年代の半ばから十年間、私がかつて所属した新潟大学法学部に存在した「法政コミュニケーション学科」の話させてください。

この学科には最大で七名の外国人教員がいました。三年任期でイギリス、アメリカ、ドイツ、フランス、中国から採用し、法学・政治学専攻の教員と外国語専攻の教員が、原語で学生に講義しました。

教養部改組の後のドサクサに紛れてつくった新しい学科でしたが、結局、二〇〇四年の法科大学院発足に合わせて、学部教育を縮小したときにこの学科を廃止してしまいました。今から思いますと、私自身も含めた当時の若い教員や学生、そして来日した外国人教員にとっては、有意義だったと思います。私の発想の源には、常にこの「法政コミュニケーション学科」での経験があるのです。

貞観年間から  
東日本大震災まで

## 日本歴史災害事典

北原 隆子 編  
松浦 隆 編

人文系、理工系の最新成果を結集。これからの防災・復興を考えるための(災害総合事典)誕生! **15750円**

## 日本史色彩事典

丸山 伸彦 編  
**7875円**

約550の色名や、織物・絵画・文献などに関する約940項目を収録。伝統色が鮮やかに甦る。

## 明治時代史大辞典

宮地 正人 編  
佐藤 能丸 編  
櫻井 良樹 編

### 第2巻 (さ～な)

あらゆる分野の事項・人物約9500項目を詳細に解説した総合歴史大辞典。 **29400円**

読みなおす  
日本史 刊行開始!

### 飛鳥

その古代史と風土  
門脇 禎二 著  
日本古代史の泰斗が、多彩なテーマで飛鳥の謎に挑んだ名著。 **2625円**

### 犬の日本史

人間とともに歩んだ一万年の物語  
谷口 研語 著  
様々なエピソードで綴った交流史。 **2205円**

### 鉄砲とその時代

三鬼 清一郎 著  
よみがえるキリシタンの世紀。書き下ろしの「終章」を増補。 **2205円**

### 吉川弘文館

〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8  
電話03-3813-9151 / 価格5%税込  
2012年版「出版図書目録」送呈

## 二一世紀教養教育の行方

小林傳司

(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)

### 白熱教室

昨年の一二月にNHKの白熱教室Japanに出演した。マイケル・サンデルがハーバード大学で行っている講義が白熱教室という番組名で放映されて以来、学生との討議を中心とした新しい授業スタイルが評判になり、日本でも類似の取り組みを紹介しようという趣旨だったようである。

私の授業は、昨年の東日本大震災とそれに続く福島原子力発電所の事故をテーマに、「震災前後何をしておくべきだったのか」、そして「震災後何をすべきなのか」という二つの問いを立てて、学生に討論させるというものであった。これは二〇〇五年に大阪大学にコミュニケーションデザイン・センター(以下、CSCD)が設立されて以来、毎年行っているスタイルのものである。基本的に、大学院生それも複数の研究科の大学院生混成による討論型授業で

ある。なぜこのような授業をしているのかは、後で説明することにしよう。

放映後それなりの反響があったが、とりわけ興味深かった声は「日本の学生でもあんなに発言するのだ」というものであった。サンデルの授業で学生が積極的に発言している風景を見た多くの日本人(そして大学関係者も?)は、日本の学生にはあのようなふるまいは出来ないと思っただのである。しかし、学生が積極的に発言する授業を作ること自体は、日本であれアメリカであれそうむずかしいことではない。少なくとも七年前この種の授業をしてきた我々はそう思っていたので、私の授業に対する反響には少し驚いたのである。

もちろん私の授業にも、この七年間の経験に基づくそれなりの工夫はある。学生に対していきなり、さあ議論しましょう、とやるのではない。大事なポイントは二つある。

たテーマを紹介しておこう。「アメリカ産牛肉の輸入の開は、どのような条件が満たされれば許されるか」(アメリカでBSE感染牛が発生し、日本が輸入を停止していた時期に行った授業)、「高レベル放射性廃棄物の処分はどうあるべきか」、「地球温暖化対策として、二酸化炭素の排出規制はどうあるべきか」などである。

### 大学院共通教育

今紹介した授業を提供している大阪大学のCSCDは、コミュニケーション教育を大学院共通教育として提供することを使命の一つとして設立された。このセンターの設立の趣旨自体が、現在の大学および大学院教育に対する問題意識の表現であり挑戦なのである。

研究大学を標榜する総合大学(大阪大学もその一つである)にはいくつもの学部・研究科がある。そこには多数の学生と大学院生が学んでいるが、教育の実態をみると、学生は学部・研究科どころか学科、専攻のレベルで閉じたか

まず一つ目は研究科の異なる大学院生の混成による授業という点である。出席する学生の専門領域は極めて多様になっている。昨年の白熱教室の場合で言えば、工学、理学、国際公共政策、保健学、文学、人間科学、基礎工学、情報科学と多彩であった。二つ目はテーマの選び方である。これだけ専門の異なる学生を集めて行う討論型授業の場合、特定の専門性が議論を支配するようなテーマにすると、学生たちが「平等」に議論に参加することが難しくなる。学生の言い方を借りれば、特定の学生が「ホーム」で、他の学生が「アウェイ」になると平等感が失われるというわけである。全員が「アウェイ」になるようなテーマが望ましい。さらに言えば、正解のない問いを中核に据えることができるとなおよいことになる。サンデルの授業でも、正義や倫理をめぐる問いが中心であり、現実的なテーマでありながら簡単には正解が定まらないものを扱っていたことに気付くはずである。

ちなみに、私たちがここ数年、この授業で取り上げてき

### 権力の病理

誰が行使し誰が苦しむのか  
医療・人権・貧困

ファーマー 貧困国での無償医療で著名な医師=人類学者による現代世界の病理の分析と処方箋。A.セン序文。豊田英子訳 ¥5040

### 1968年

反乱のグローバリズム

フライ なぜ学生運動が同時期に世界中で起こったか。米仏独伊英日、東欧の出来事を歴史家が詳細に分析。下村由一訳 ¥3780

### 小石、地球の来歴を語る

ザラシーヴィッチ 小石の中の痕跡を地質学的・古生物学的に読み解き、固体地球史をエレガントに再現。江口あとか訳 ¥3150

### 動物の環境と内的世界

ユクスキル 生物進化の一元論から環境への多様な適合性へ。「環境・対世界・機能環」による認識論的生物学。前野佳彦訳 ¥6300

### イトコたちの共和国

地中海社会の親族関係と女性の抑圧  
ティヨン ヴェールによる女性隔離の起原は宗教でなく、親族構造であると解明した民族学の古典的名著。宮治美江子訳 ¥4200

### 知識と経験の革命

科学革命の現場で何が起こったか  
ディア 科学はいかに自然を理解することから利用することへ(革命)されたか。科学革命期の最良の見取図。高橋憲一訳 ¥4410

### ドビュッシーをめぐる変奏

印象主義から遠く離れて  
シェフネル 文学、演劇、美術との濃密な関係を詳述し、ドビュッシーの本質と革新性に迫った先駆的重要作。山内里佳訳 ¥3990

東京文京本郷 5丁目32-21 **みすず書房**  
tel. 3814-0131 fax 3818-6435 (税込)  
http://www.msz.co.jp



リキウムで学んでいる。理工系になると専攻以下の研究室単位での教育になっていることも多い。一日中研究室にとどまり、同じ分野の学生としか話をしないということもざらである。他の学部の学生と共に学ぶ機会は、学部の最初の二年くらいであり、その後は同じ専門の学生だけの教室で学ぶことになりがちである。総合大学と言いつつ、学生の生活は単科大学でのそれとあまり変わらない。

この仕組みは専門分野を効率的に修得させ、ディシプリンの専門家(研究者)を養成するには便利である。しかし、平成三年の大学院重点化以来、日本の大学院生の数は二・八倍に増え(といっても国際的には少ない方であるが)、大学院教育の性格も変容を迫られている。大学院修了者のうち大学や研究機関の研究職に就くのは、約半数に過ぎなくなっている。半数以上が研究職以外の多様な職に就く時代を迎えているのである。とすれば、大学院教育もそれに対応し、徒弟制を基本とする専門家養成教育に終始せず、多様な職業に就く学生を想定した教育を考えなければならぬはずである。

専門教育をやめろというのではない。大学院で学ぶ専門性を研究以外の場面で活用できる能力を身につけさせる工夫がいると言っているのである。イギリスではこの問題に対して、transferable skillつまり多様な職において活かせる「汎用力」の習得のための教育が展開されている(例えばイギリスのインペリアル・コレッジの場合、http://

境問題であれ、格差の問題であれ、東日本大震災以後のエネルギー政策の問題であれ、特定の専門分野だけで解決できるものは一つもない。複数の専門分野の動員が不可欠なのである。

では複数の分野を学べばいいではないか、といわれるかもしれない。ダブル・ディグリーや副専攻システム、あるいはもう少し小規模の副プログラムといったものを整備して、多様な分野を学べるようにすることが必要なのは確かである。しかしこれには限界がある。人間の持ち時間は有限であり、今後必要とされる分野のすべてを修得することははや不可能だからである。

私たちは次のように考えた。単一の専門分野で解決できない問題に取り組むためには、複数の専門家の協働が必要である。そのためには、自らとは異なる専門分野の存在を知り、その特性を理解し、その専門性を尊重する能力を備えた専門家を育成することが重要である、と。

まとめるとこうなる。総合大学のメリットを生かした教

www3imperial.ac.uk/graduateschool/transferableskillsprogramme)。そのための教育の目的の中には、自らの研究に有用なスキルの習得と並んで専門外の多様な人々に自分の専門の内容を伝え、研究と社会との関わりやそれをビジネスにつなげる可能性、学問の社会的意義や倫理的問題などを反省的に把握させること、などが挙げられている。

CSCDの提供するコミュニケーション教育も、イギリスの事例とは独立に構想されたものであるが、結果的にこれと似ている。大学院で深く専門性を学ぶことの代償は、視野の狭窄である。しかも視野の狭窄を覚悟しなければ専門性は深くならない。他方、彼らの多くが研究職以外の多様な職種に就くことを想定するならば、視野の狭窄は職業生活において大きなマイナスとして働く可能性がある。ディシプリンを究める能力だけでは、企業やNPO、行政といった職場で出会う多様な人々と共に仕事をすることは難しい。したがって、大学院教育の中に専門性を深めるというベクトルに加えて、視野を広げるといふベクトルが必要になるという考え方のもとで、コミュニケーション教育を設計していったのである。

さらにもう一つの視点を付け加えておきたい。研究職にも、視野の拡大のための教育は必須の時代になっている。現代社会が抱えているさまざまな問題は、単一のディシプリンを究めることによっては解決できないものが多い。そもそも正解があるかどうかかわからない問題が多い。地球環

育、研究職以外の多様な職種での専門性の活用、複合的問題に対して協働できる専門家の育成という三つの目的を実現するための授業がCSCDの試みである。その眼目は、異なる研究科の学生の混成によるクラス、正解のない問いをテーマとすること、異分野間で討論をすることによるコミュニケーション能力の向上の組み合わせである。

### 視野の拡大としての教養教育

一九九一年の大学設置基準の大綱化により、一般教育と専門教育の区別が廃止され、大学は自主的に四年間のカリキュラムを設計することができるようになった。この方針を打ち出した大学審議会の狙いとは裏腹に、現実に各大学で進出したことは教養教育の削減、教養部の解体であったことは周知のとおりである。しかし、二〇〇〇年ころから教養教育軽視を憂う声が高まり、あらためて教養教育の再建の取り組みが始まっている。

二〇〇八年には中央教育審議会が「学士課程教育の構築

## 藤原書店

### 朱子学化する日本近代

小倉紀蔵 日本の儒教化は明治から始まった。福澤諭吉・丸山眞男らの近代日本理解を批判し、通説を覆す気鋭の問題作。 5775円

### 多田富雄新才能全集

多田富雄 「能」でなければ描けない現代的課題を追究した、新才能全集十作と小話、英訳。三回忌記念出版。 笠井賢一編 8820円

### 美人の歴史

G・ヴィガレロ ファッション・美容、エステはいつ誕生したか。普遍的・絶対的な「美」は民主化され、強迫観念にまでなった。後平澤子訳 4830円

### 書簡集 1858-1902

ゾラ・セクション⑩(全11巻・別巻一)セザンヌ/フロベール/マネ/ミシュレ/ツルゲーネフ/ドレフュスほか 本巻完結 小倉孝誠編・解説 8580円

### 金子みすゞ 心の詩集

The Poetry of Misuzu

よしだみどり編【英訳・絵】 達意の英訳とあたたかな絵。【通常版】1890円/【特別付録CD付】2940円

◎総勢106名の多様な執筆陣が語る。

歴史 環境 文明 環 |

学芸総合誌 季刊 環 |

vol. 49 2012年春号

(特集) 3・11と私

東日本大震災で考えたこと

赤坂憲雄/石牟礼道子/今福龍大/上田正昭/川勝平太/辻井喬/町田康/松岡正剛/村上陽一郎/渡辺京二ほか

(講義)金時鐘/鄭喜成(寄稿)アルノ・ナント/川満信一(書物の時空)粕谷一希ほか(連載)小倉和夫ほか 3780円

月刊 機

B6変32頁 5月号 No.242

山田國廣/小倉紀蔵/上田篤/阿部直哉/金順姫/竹中平蔵

/沈国威/加藤晴久/尾形明子/粕谷一希/山崎陽子/一海知義ほか

年間購読料2000円(送料込) ◎見本誌・ブックガイド呈 \*表示価格税込

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523 振替 00160-4-17013 TEL03-5272-0301 ホームページ http://www.fujiwara-shoten.co.jp/

に向けて」という答申を出し、学士課程で育成する二一世紀型市民の内容（日本の大学が授与する学士が保証する能力の内容）に関する参考指針を示すことを打ち出した。そして学士課程の具体的な教育内容については、日本学術会議の検討に委ねられたのであった。筆者はこの学術会議での検討に参加し、とりわけ「学士課程の教養教育のあり方」の議論に深くかかわることになった。

この検討に参加して気付いたことは、大学の教養教育については想像以上に多数の著作が出版されており、そこにいくつかの共通点がみられることであった。まず、視野の拡大という点で学士課程における教養教育の再建、拡充を訴えるものが多い点である。この点に関連して、学士課程では教養教育を重視し、いわゆる専門教育は大学院に振り分けるという分業を訴える声が多い点である。そして、今後求められる教養教育では問題解決力やプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力など「〇〇能力」(generic skillと呼ばれる)が重視されるべきだという主張が多い点である。

学術会議での検討結果については「大学教育の分野別質保証の在り方について」(二〇一〇年七月二二日)を参照していただくことにし、ここでは教養教育はどの段階で与えられるべきかという点を中心に問題提起を試みたい。今述べたように、学部は教養教育中心という発想は根強い。そして学部では入学直後という発想になりやすい。つまり、

一定の意味があったように思える。しかし同時に行うべきだったことは、高年次や大学院においても学生が他の分野にふれる機会を保証する仕組みを作ることだったのである。大阪大学では「間もなく社会に出ていく学生に必要な知識や技能を与える教育」として学部高年次生と大学院生を対象にした「高度教養教育プログラム——知のジumnナスティックス」を開発しているが、その発想は今述べた点にある。

「〇〇能力」などの generic skill が今後の教養教育において重要であるという指摘についても少し述べておきたい。このような能力の重視自体は従来の知識注入型教養教育に対する反省から生まれたものであり基本的に賛成であるが、この問題の立て方自体にはやや疑問が残る。つまり、依然として専門とは別個に教養教育（知識ではなく能力に切り替わってはいるが）が設定されているのである。教養とは知の断片をひけらかすことではなく、多様な知識の全体構図を俯瞰して把握する能力のほずである。仮に「幅広く」ということに意味があるとすれば、それは自分の専門分野との関わりにおいて世界の知の構図を自分なりに説明できることに寄与する営みでなければならぬであろう。

例えばコミュニケーション能力でも、伝えるべき何か、そして聞くべき何かなしに「コミュニケーション能力」だけを訓練することはできない。大学や大学院であれば、自らの専門が伝えるべき内容の候補であり、他の専門分野や

まずは幅広く知識を身につけ（「教養を身につける」？）たうえで、専門教育に進むという順序性が無意識に前提にされている。しかし、これはかつての少数のエリート育成の際に建前とされた順序性にすぎない。しかし現代において、この順序性に意味があるのかどうかは疑問である。

人間の学習は個人差の大きいものである。さまざまな分野を幅広く学ぶこと自体は悪いことではないとしても、一人一人の学生には、その分野に出会うにあふさわしい「時期」とでも言うべきものがある。「面白い」とか「学びたい」と思える時期に出会えるかどうかが重要なのである。かつての人文・社会・自然の三系列による「一般教育」が崩壊したのは、この時期の問題を考えていなかったからではないだろうか。大学教育の使命の一つが「教養を与えること」であるとするれば、その時期は大学にいる期間全体に拡大されてしかるべきであろう。あえて言えば、大学院に進んでも教養教育は必要ではなくである。

ある程度専門領域を学んだことによってはじめて、他の分野のことを知りたいと本気で思うこともある。つまり専門を学ぶことと他の分野を学ぶことは広い意味での知的関心によってつながっていることが望ましい。教養は専門とは全く別の知的アクセサリ（「ひけらかす教養」）になつてはならないはずだからである。

大学設置基準大綱化の後、初年次から専門教育を組み込んだくさび型カリキュラムがかなり広がったが、それには他者の具体的な経験が聞くべき内容のほずである。したがって、このような「〇〇能力」は本来、専門教育を通じて育成されなければならないのである。

私自身は、大学、そして大学院で専門を学びつつ身につけるべき教養は、次の三点によって方向づけられるべきだと考えている。

- ①自分が学んでいる専門分野の内容を専門外の人に的確に伝えることができること
- ②自分が学んでいる専門分野の社会的・公共的意義について考え、理解できること
- ③自分が学んでいる専門分野の特性とその限界を理解

し、他の専門分野との関係を理解できること  
そして言うまでもないことであるが、これはすべて専門教育と教養教育の本質的つながりを前提としていることである。そして順序性についても、教養教育の「次に」専門教育という発想ではないこともお分かり頂けると思う。

この小論の前半で紹介した授業が、大学院共通教育であり、しかも一種の教養教育になっているというのは、こういう意味なのである。つまるところ、教養を身につけるとは、視野の狭小化を犠牲にして身につける深い専門性を、もう一つの目で反省的に眺める訓練のことなのである。いわば、学問分野の遠近法、価値の遠近法の習得である。

# 熟柿化する大学はどこに向かうのか

山上浩二郎 (朝日新聞「教育・高等教育」専門記者)

いま大学を考えると、晩秋のころ田舎でよく見た光景が浮かんでくる。孤独な熟し柿の姿である。葉っぱはすでに落ちていく。収穫されずに残されたまま、幹から伸びた枝に柿はぶら下がる。果実が内側で熟して柔らかくなり、どんだん甘くなり液化する。皮も濃い赤色になり、同時に透き通ってくる。野鳥につつかれて無残な姿をさらすこともあるが、それを免れた熟柿はやがて時期がくると自らの重みで地面に落ちる。

## 熟柿化する大学——三〇五万人市場の均衡

大学は、熟柿化しているのではないだろうか。青い柿のころは、土壌から栄養を吸い取りながら陽光を浴びてどんだん吸収して実を膨らませてきた。大学でいえば、旧文部省による保護や指導、計画のもと、それなりの政府予算や家庭の理解に支えられて、丁寧に育てられてき

た。もちろん小学校から高校までの初等中等教育と大学入試という栄養分のある強固な土壌に支えられていた。果実の部分にあたる大学の研究や教育は、社会が成長期にあるとき、思う存分テーマを選び解明されていない世界を切り開いていくことができた。栄養が濃縮されている果実のように、教育にも余裕がある。大学進学を許された一握りの若者は放っておいても育って社会に出た。教員の数も、学生数も増え、大学進学率も上がり、大学は規模が大きくなり、質を問われることなく、実を膨らませてきた。

しかし、世の中の成長が続いているときは、深刻な問題が見えてこない。社会が縮小、停滞期に入るとき、果実は膨らむのをやめてしまう。同じ大きさで、同じ栄養分でいかに熟していくかということが自己目的のようになる。大学は、財政難や不況・デフレもあり、人的、資金的にも投入が進まず、膨らむことが許されなくなる。学生数も少

化で限界を迎える。それでも大学進学率が上がり全入時代に直面するのだから中身は薄まって液化するといつてもいい。研究や教育はそれぞれそれまでに蓄えてきた資源をどう使いこなすかという問題になってくる。専門領域は細分化して、高度な説明や解釈をするという認識の世界に入ってくる。教育もまた同じで、教員の仕事を増やしながらいかに効果を上げるかというところに力点が置かれる。さまざまに大学教育の道具を取り入れられる。皮肉なことに教育活動という中核の密度を薄くする方向に小道具は働く。

ところが、外から見ると果実は厚い皮で仕切られている。いくら大学内部で教育の効率や専門領域の研究業績が上がったとしても、内実は見えてこない。外から色が変わっているのはわかるが、いったい実はどうなったのか。いらだちや刺激を与えようとするが、それでもわからない、説明されない、理解できないとなると、いずれ世間からは手の届かない存在として関心が薄らぎ、風景の一つにすぎなくなる。そして、突然何かに落とされることのないとすれば、大学という熟柿は孤独にぶら下がり、自ら落ちるのを待つ。団塊ジュニア世代が大学に通っていたところから二〇年近く、大学、大学院、短大に通う学生の人数は三〇五万人前後で維持されている。当時、一八歳人口はピークで二〇〇万人を超えていた。いまは一二〇万人の水準。それでも全体の学生数は大学進学率の上昇で三〇五万人規模を保っている。

その間、おどろおどろしいには、国内の経済規模は縮小してきた。企業では給与削減は当たり前のようになり、デフレ基調、不景気が長年続いてきた。大学は政府からの交付金や助成金が減らされコスト削減を迫られはしたが、民間と比べれば、教員数は増え、給与などの経費をみても縮小してはいない。もちろん、大学数の約八割をしめるのは私立大学で、家庭から支払われる授業料収入に頼ってきた。授業料は横ばいで一定の収入は確保されている。少し乱暴に言えば、大学で働く教職員や施設維持を保っているのは、大学進学者が確保できるからこそといえる。結果として、この三〇五万人市場を維持するため、高校から大学との間を隔てる入試選抜という機能は弱まらざるを得ず、えり好みさえしなければだれでも大学に入学できるようになったという見方もできる。私大では、すでに学力試験を課さない推薦・AO入試が入学定員の五割を超えている。国公立を合わせても比率は高まる傾向にある。

この入試の多様化を否定的にとらえる必要はない。しかし、大学を支える土壌が変質したのは確かだ。高校教育そのものも例外ではない。大学よりも先に進学率は一〇〇％に近い状態で高止まりしている。必修科目という生徒の共通性を維持する装置は減少し、新しい学習指導要領には中学校教育の学び直しも盛り込まれている。高校時代、中学校の復習学習に取り組んできた生徒も大学に通う。

この二〇年で、総合学科が創設され、専門高校、普通科

高校のコース設定など教育課程も一気に多岐に分かれた。高校の中間層の学習時間が半減したという調査もある。同じ高校生といえども、似たような学力水準や似たような学習経験を期待するのは難しい。学力の上下が開き、学びの幅も広がり、全体として拡散・希薄化した状態。そんな生徒の集団を大学は受け入れている。

### 進行する「教育の雑務化」と「研究の瑣末化」

では、大学教育は変化したのだろうか。確かに変わったが、劇的に変わるわけもなく、教育の雑務化が進んでいる。国内の経済市場が縮小するなかで、一定規模の「大学市場」の均衡を保ちながら何年も維持していることは、格段の投資が進まないことも意味する。

九〇年代初頭の大学設置基準の大綱化は、大学に自立を促し、自己点検・自己評価を迫り、教育や研究を進めるためには自ら組織を改めカリキュラムを練る機会を設けるねらいがあった。たしかに、大学生としての学習方法や生活の基盤を学ぶ初年次教育や高校の学び直しのリメディアル教育、大学教員の教育方法を発展させる自発的な集団活動（FD）が取り入れられてきた。第三者評価制度、シラバス（授業計画）の公表、学生による授業評価、出欠確認の厳格化、四年間通じた成績表の作成など、あげればきりがないほど、道具はそろって来た。

しかし、教育の核心部分は教員と学生が作り出す授業（教タッフもなかなかそろわない。本気になれば、国際化は教育環境を上げて質の向上の起点にもなりうる喫緊のテーマだが、本当に必要だと感じて、自腹で資金と労力をかけて自発的に動こうとする大学はごく少数だ。ましてやエリート育成が期待される大規模大学ほど動きが鈍い。大学は国際化に自ら身を投じる状態ではなく、対応するレベルにとどまる。

本当にグローバル人材の育成に本腰を入れるのなら、就職活動も、これまで続いてきた新卒一括採用に異議を申し立て、大学三年生からの就職活動を堂々と拒否する大学が出てもいい。「自分たちは四年たつぷりと教育するので邪魔はしないでほしい。その代り四年後、真にグローバルな学生を出す」と宣言する方針が打ち出せない。それができれば大学が独立した自治の教育機関として自立を宣言することを意味する。

研究の世界も教育の雑務化と似ていなくもない。欧州とりわけドイツや米国、日本を見ても、社会や経済が発展していくときは研究も発展する。未踏の分野でさまざまな研究が進み、新たなテーマを見つけて、再び社会に還元する。そして、研究のための資金が増えて、研究者の数も増えていく。すると、その後は学問分野がどんどん細分化していき、本筋の研究とは異なる瑣末的な研究も日常のテーマになっていく。さらに、大学教員のポリュームの維持、研究費の永続的な確保という厄介なマンネリズムも起き始め

育活動）そのものにある。少人数教育や学生と教員間の世代間格差を埋めるメンター制度の充実、学士課程の体系化、専門教育を理解するための基礎教育（経済学にとつての高校数学）などに投資を進めなければならないはずだが、現実には中核から少しはずれたものが少なくない。いわば、教員がさまざまな雑務に労力をさく方向で教育改革が進んでいる。この教育の雑務化という流れは、文部科学省の議論を見ている限り、変わらない。

社会は国際化のなかで激しく動いている。新規採用の半分が外国人という電機メーカーも現れた。利益を追求していく企業が国際市場にうって出て競争力を高めようとするのは無理もない。しかも、企業も内部で国際化に対応する人材を教育するためにお金をかける余裕はなくなり、人材をつくることから外部の労働市場で買う時代に入っている。そうすると、大学でのグローバル人材育成に圧力ががかつてくるのも自然な流れとなる。

とはいえ、大学がそれに対応できるのかどうかは疑わしい。大学で英語の授業を増やすには外国語を話す教員を雇うことが必要になる。学生を海外に留学させるにも、相手先の大学を探して単位互換や学位認定の協定が必要になる。送り出すには、受け入れも必要になる。留学生の宿舍や送り出しの奨学金の設定もいまのままでは十分ではない。仮に英語の授業を日本の大学で設け始めても、成績が悪くなると思えば学生は敬遠する。国際化の準備をするス

る。たしかに学問は精緻に続けられ、ときには新解釈や発見、説明の精密さが進化していくはずだが、論文の多寡や引用にとらわれる人も出る。それは一つの道が枝分かれして、その先の道が同じ位置で巧みに舗装されていくに過ぎない。たとえば専攻分野を表す学士の種類は大綱化前、約三〇種類。いまは約七〇〇種類に拡散した。それどころか評価制度という雑務化や政治との深い関係は、道すらみえにくくする。たとえば東日本大震災で表面化した原子力工学の問題を見れば理解できる。

自分の研究が、学会ではなく社会全体のどの地図のどのへんにあるのか、まずいまの地図を書くことから始めなければならぬ。道の細さや終着感が現れたとき、それは認識という次元ではなく、価値の問い直しという根本からの否定から始まらざるをえない。その新たな価値に基づいて、それぞれの専門領域を超えた新たなものが見えてくる。そのためにも、異物という新たな人材や無駄とも思える巨額の資金が必要になってくる。

しかし、大学が組織的に学部の編成替えをすることはあっても、特定分野に向けて人材や資本を集中させ、他部門や他分野の人材を切って痛みを出すダイナミズムは期待できない。トマス・クーンの「科学革命の構造」で説かれたパラダイムの転換が大学のなかで起きるのか、大学外で起きるのか。そんな高度な選択ではない。日本では起きる気

配があるのだろうか。

## 大学の使命

大学教員個人のレベルでは、さまざまな価値の問い直しは少なくない。しかし、個人の力を結集した組織が、価値を問い直すためにどう動くかが問われている。それはおそらく政府のお金の多寡ではない。個々の研究者の集合体が自立的にどう使命を掲げて実行するかという問題が先にくる。戦後、大学は自治が尊重されてきた。絶対に必要なものであることは間違いない。研究者個人の自由、学問の自由も保証されなければならない。その延長線上に教授会の自治という慣行も続いている。大学の停滞という文脈で語られるとき、必ずこの「教授会自治」の保守性や機動性を欠くマイナス面をあげる人がいる。大学の執行部は強くとも、その方針を学内全体で進めようとすると必ずと言っていいほどその壁にぶつかる。そこで穏便に済ませるのが前例踏襲である。たとえば、国立大学で日常的経費が全体で1%削られるとすれば、それぞれの学部や各局の予算もまんべんなく1%減らして痛み分けすることで組織の不満を防ぐ。そこには、限られた予算を乗り越えて前進する意思は感じられない。仲間うちの気配りで終わる。

とすれば、大学には差し迫り何を求めるのか。

大学入学者の学力水準を無理やり体よく一定に切りそろえることではなく、自らの使命のもと、学生や社会人を受

け入れて学修のどこかで意欲や関心に火をつけること。

さらに、民主主義の担い手として自覚することである。メディアの急速な発展と長い停滞の時期があると、社会が短絡的に傾きがちだ。一瞬の課題設定と仮想敵を見つけ出して信を問い短期間の選挙で権力を握る、いわば「瞬間的民主主義」の台頭に対してどんなセクターが対抗できるのかという現代的問題がある。政治の世界ではありえない。行政や企業でもない。人材や組織、時間に余裕のある大学が社会の原理や真理を学生や社会人に持続的に教えて循環させるほかない。つまり、「持続的民主主義」の担い手として、自らの価値を見つけて、何らかの責任を果たさざるを得ないのでないか。森林にある保水機能のように、「民主主義を燃<sup>よ</sup>つていく人材の保水機能」を大学に期待したい。

もう一つ、大学は、まだまだ他の組織と比較して、ものごとを発明、発見するのに適している。いまの大学とまったく異なる新種の大学を発見、発明するのは大学以外に考えられない。ただ、いつになるのか。その間に大学数は減っているかもしれない。

最後に、熟柿は自ら落ちるとどうなるか。果実はつぶれるものの種を残して新たな芽を出させるほかない。青い実がたくさん付いた苗木を誰かが買って植えるという手も少なからずある。だが、それが土壌に根づくかどうかはわからない。



英文校閲



和英翻訳



組版・印刷

# 英文学術書の執筆・出版 サポートはお任せ下さい！

## カクタスのここが強み

### アカデミックに特化した豊富な経験と実績

カクタスは、これまで全世界で2万人以上の研究者、日本においては600以上の大学様に英文校正を中心とする執筆サポートを提供してきた実績があります。

### 翻訳～校正～組版～印刷まで、英文出版のためのトータルサポート

原稿を頂いてから印刷物(書籍、パンフレット等)制作までの全工程をサポート。複数業者との煩雑な調整がなく、制作期間中も日々の業務に最大限注力することができます。

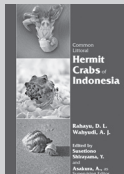
### 専門分野の英語エキスパートによる作業チーム

国際的なアカデミック舞台で通用する出版物の作成には、各分野の知識を持つ英語のプロによる英文校正・英文組版が不可欠です。複数の研究領域に特化した校閲・翻訳スタッフが多数在籍しています。

#### 制作物一例

- 印刷物  
書籍、報告書、論文集、  
紀要、ジャーナル、パンフ  
レット、チラシ、記念誌
- 電子メディア  
電子ジャーナル、  
ウェブサイト

#### 実例



京都大学学術出版会様

日本物理学会様

# CACTUS

日本の「国際化」を応援します

カクタス・コミュニケーションズ株式会社

〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-2-3 富士ビル7階

[www.cactus.co.jp](http://www.cactus.co.jp) | Tel: 03-6269-9550 | Fax: 03-4496-4557

※ホームページ内お問い合わせフォーム又はお電話にてお問い合わせ下さい。

一般社団法人  
大学出版部協会  
加盟出版部一覧

北海道大学出版会  
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目  
北海道大学構内  
TEL: 011-747-2308 FAX: 011-736-8605

弘前大学出版会  
〒036-8560 弘前市文京町1  
弘前大学附属図書館内  
TEL: 0172-39-3168 FAX: 0172-39-3171

東北大学出版会  
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1  
東北大学構内  
TEL: 022-214-2777 FAX: 022-214-2778

流通経済大学出版会  
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120  
TEL: 0297-64-0001 FAX: 0297-60-1165

聖学院大学出版会  
〒362-8585 上尾市戸崎1-1  
TEL: 048-725-9801 FAX: 048-725-0324

聖徳大学出版会  
〒271-8555 松戸市岩瀬550  
TEL: 047-365-1111 FAX: 047-363-1401

麗澤大学出版会  
〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1  
TEL: 04-7173-3320 FAX: 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会  
〒108-8346 港区三田2-19-30  
TEL: 03-3451-3168 FAX: 03-3451-3124

ケンブリッジ大学出版局  
〒140-0002 品川区東品川1-32-5  
TEL: 03-5479-7265 FAX: 03-5479-8277

産業能率大学出版部  
〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12  
サピアタワー9階  
TEL: 03-6266-2400 FAX: 03-3211-1400

専修大学出版局  
〒214-0033 川崎市多摩区東三田2-1-2  
専修大学購買会別館2階  
TEL: 044-911-7179 FAX: 044-911-1382

大正大学出版会  
〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1  
TEL: 03-5394-3026 FAX: 03-5394-3038

玉川大学出版部  
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1  
TEL: 042-739-8935 FAX: 042-739-8940

中央大学出版部  
〒192-0393 八王子市東中野742-1  
TEL: 042-674-2351 FAX: 042-674-2354

東京大学出版会  
〒113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内  
TEL: 03-3811-8814 FAX: 03-3812-6958

東京電機大学出版局  
〒101-8457 千代田区神田錦町2-2  
TEL: 03-5280-3433 FAX: 03-5280-3563

東京農業大学出版会  
〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1  
TEL: 03-5477-2666 FAX: 03-5477-2747

法政大学出版局  
〒102-0073 千代田区九段北3-2-7  
法政大学一丁坂校舎内  
TEL: 03-5214-5540 FAX: 03-5214-5542

武蔵野大学出版会  
〒202-8585 西東京市新町1-1-20 武蔵野大学構内  
TEL: 042-468-3003 FAX: 042-468-3004

武蔵野美術大学出版局  
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7  
TEL: 0422-23-0810 FAX: 0422-22-8309

明星大学出版部  
〒191-8506 日野市程久保2-1-1  
TEL: 042-591-9979 FAX: 042-593-0192

関東学院大学出版会  
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1  
TEL: 045-786-7164 FAX: 045-786-9898

東海大学出版会  
〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35  
東海大学同窓会館3階  
TEL: 0463-79-3921 FAX: 0463-69-5087

名古屋大学出版会  
〒464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内  
TEL: 052-781-5027 FAX: 052-781-0697

三重大学出版会  
〒514-8507 津市江戸橋2-174  
三重大学附属病院旧館5階  
TEL: 059-232-1356 FAX: 059-232-1356

京都大学学術出版会  
〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69  
京大吉祥南構内  
TEL: 075-761-6182 FAX: 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部  
〒581-8511 八尾市築音寺6-10  
TEL: 072-941-8211 FAX: 072-941-9979

大阪大学出版会  
〒565-0871 吹田市山田丘2-7  
大阪大学ウエストフロント  
TEL: 06-6877-1614 FAX: 06-6877-1617

関西大学出版部  
〒564-8680 吹田市山手町3-3-35  
TEL: 06-6368-0238 FAX: 06-6389-5162

関西学院大学出版会  
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155  
TEL: 0798-53-7002 FAX: 0798-53-9592

広島大学出版会  
〒739-8512 東広島市鏡山1-2-2  
TEL: 082-424-6226 FAX: 082-424-6211

九州大学出版会  
〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内  
TEL: 092-641-0515 FAX: 092-641-0172

NESE  
UNIVERSITY  
SSES

91  
2.7  
MER

大学出版91号 (2012年夏)  
2012年7月1日発行  
頒価100円 (〒共)

発行所:  
一般社団法人大学出版部協会  
ISSN 0913-3305  
振替00170-8-389131

〒102-0073  
東京都千代田区九段北  
1丁目14番13号  
メゾン萬六403号室

TEL: 03-3511-2091  
E-MAIL: mail@ajup-net.com  
URL: http://www.ajup-net.com/

—  
使用書体:  
小塚明朝 Pr6N, R, M  
Minion, Display  
使用紙:  
紀州の色上質 特厚口 藤

—  
表紙デザイン:  
白井敬尚形成事務所